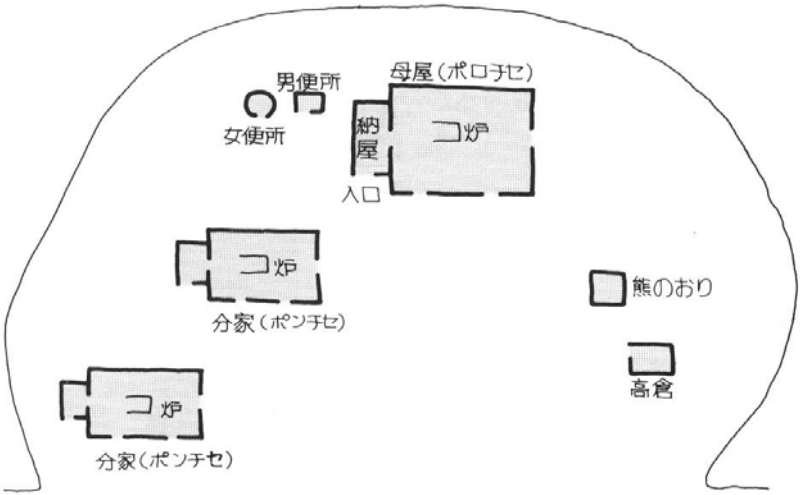
北海道 アイヌの家

北海道の先住民族であるアイヌが、１９世紀末ごろまで暮らしていたコタン（村）を、アイヌの人びとの協力で再現しています。敷地の奥にあるのが両親、手前の２棟が分家した子どもたちの家です。アイヌの人びとは炉を神様の寝床と考えたため、家は炉を中心に造られています。



【建築材の特徴】

屋根や壁に使われているのはイネ科の植物（アイヌ名：ラペンペ）で、１本１本がストローのような中空構造になっています。これらを束ねると厚い空気の層ができ、断熱材と同じ役割をはたします。アイヌは古くからこの資材の特性を活かし、自然の断熱材で家をまるごと覆うことで、寒い時期でも比較的あたたかく暮らすことができたのです。

“アイヌ民族”とは

アイヌ民族は、東北地方の北部から北海道、樺太南部、千島列島にかけて古くから暮らしてきた先住民族です。かつてはアイヌモシリ（アイヌ民族の大地）の豊かな自然環境を基盤として、採集・狩猟・漁労を中心とした生活を営む一方、本州や大陸の諸民族とも活発な交易をしていました。またアイヌ語やイオマンテ（クマの霊送りの儀礼）、ユカラ（口承文芸）など独自の豊かな文化を育んでいました。

明治時代に入ると、アイヌモシリは一方的に日本の領土に組み込まれました。アイヌ語や伝統的な生活習慣は否定され、その多くを失いました。今では、話す言葉も暮らしぶりも他の日本の人びとと変わりません。

近年、アイヌ民族の伝統と誇りを回復しようとする動きが各地で高まっています。アイヌ民族の代表が国会や国際的な会議の場で積極的に発言し、先住民族としての地位と権利の回復が議論されるようになっています。また、地域・団体・個人により、独自にアイヌ文化啓発活動を行っています。

現在、アイヌ民族の人口は、数万人ともそれ以上ともいわれ、全国に生活の場が広がっています。民族同士が共生できる社会の実現を目指して、多くの人びとが様々な努力を続けています。

2017.04